津村節子が描く八丈島

——「黒い潮」創作ノートの検証——

岩田（イワタ）　陽子（ヨウコ）

はじめに

津村節子は、昭和39年11月から『文学者』に連載された「海鳴」で佐渡金山の遊女を描き、丹羽文雄を「現地の郷土史家に、考証的に無瑕に近いとまでいはせた」[①]とうならせ、平成2年には戊辰戦争を描いた『流星雨』で第29回女流文学賞を受けた。津村節子の歴史小説は高く評価されてきたといえる。「黒い潮」は佐渡を描いた「海鳴」から約30年の時を経て、再び、海で閉ざされた八丈島の遊女を描いた作品である。

津村節子の「黒い潮」は平成5年2月から平成6年11月まで『文藝』に連載された歴史小説である。「黒い潮」は15歳の時に附火の罪で、八丈島に流された吉原の遊女初菊と、その7年後に同じ罪で流されてきた花蝶が、それぞれ島抜けを企てる物語である。

松本徹は「書評『黒い潮』」（『産経新聞』平成7年6月25日、朝刊）で「黒い潮」で描かれた八丈島と吉原について「こうした極端に対照的な世界が、同じ時代に存在したことに、改めて驚かされるが、この二つの世界を結びつけるのが、一人の遊女である」と述べ、与那覇恵子は「遊女の生きた吉原と八丈の歴史」（『サンデー毎日』平成7年6月25日、第74巻31号）で、「日本の過去の負の制度である吉原と八丈の実態が記録のはざまに浮かぶ二つの世界を生きた女によって生き生きと伝わってくる」と、小説世界に描かれた「吉原」と「八丈」という二つの「場所」に着目し、評価している。

津村節子はこれまで、遊女を取り上げた多くの作品を描いてきたが、「黒い

潮」では八丈島の遊女がどのように描かれていくのか、津村節子自筆ノートや、八丈島の現地取材で撮影された写真から、その執筆過程や創作意図を検証したい。

一. 資料と現地踏査

平成7年5月25日に河出書房新社より発行された『黒い潮』の巻末の「主な参考資料」に、津村節子は以下のように20点もの資料を挙げている。

ア『八丈實記』近藤富蔵　編纂・八丈實記刊行会　緑地社
イ『八丈島流人銘々傳』葛西重雄／吉田貫三　第一書房
ウ『八丈島誌』八丈島誌編纂委員会
エ『朝日逆島記』佐原喜三郎　日本庶民生活史料集成　第一巻　三一書房
オ『黒潮圏の八丈島』小川武　聖文社
カ『八丈島流人帳』今川徳三　毎日新聞社
キ『八丈島流人犯科帳』今川徳三　毎日新聞社
ク『伊豆七島流人史』大隅三好　雄山閣
ケ『離島　伊豆諸島の歴史』段木一行　編纂・武蔵野郷土史刊行会　明文社
コ『伊豆諸島巡見記録集』編纂・金山正好　緑地社
サ『伊豆海道風土記』校訂・樋口秀雄　緑地社
シ『飢饉の歴史』荒川秀俊　至文堂
ス『江戸時代　刑罰風俗細見』小野武雄編著　展望社
セ『吉原』石井良助　中公文庫・中央公論社
ソ『廓の生活』中野栄三　雄山閣
タ『遊女―その歴史と哀感―』北大路健　人物往来社
チ『遊女』西山松之助編　近藤出版社
ツ『吉原夜話』宮内好太郎編　青蛙房
テ『吉原史話』市川小太夫　奈良書房

ト『遊郭の世界』中村芝鶴　評論社

アからシは主に「八丈島」を、スからトは「吉原」を描くために使用した資料であろう。津村節子は「わが家の図書室」(『學鐙』平成18年3月5日、第103巻1号)で「取材の折、『八丈島流人銘々伝』の著者、葛西重雄②と吉田貫三氏のうち、八丈在住の葛西氏に、島中を案内していただいたが、八丈島での二人の暮らしについては何も記録がないということであった。私は二人を仮名で書き、自由に想像をふくらませた」と述べている。つまり、「黒い潮」の主人公「初菊」と「花蝶」は、仮の名前であり、創作を加えたと言っているのである。では、津村節子はどのような人物をもとに、「初菊」と「花蝶」を形成したのであろうか。

二. 津村節子創作ノートの検証

津村節子が葛西重雄に八丈島を案内してもらったというのであるから、「参考資料」として挙げられた葛西重雄の『八丈島流人銘々伝』(昭和39年11月1日、第一書房)は、「黒い潮」を検討する上で、注目すべき著作であろう。『流人明細帳』をもとに執筆したという『八丈島流人銘々伝』の「豊菊」の項目をみてみたい。

豊菊(文政四年三月流　弘化二年六月二十二日銃殺　明治元年十二月赦)
新吉原京町二丁目伊八店、遊女屋もせ後見仙右衛門抱遊女。附火の科で十五歳の若さで八丈島遠島。三根村預り。

—中略—

彼女が流されてから七年後の文政十一年に、彼女と同じく吉原の遊女で、しかも彼女が流された年と同年の十五歳の花鳥が流されて来た。それも同じ三根村預りである。
誰の目から見ても豊菊の女王の座が揺いだことははっきりしていたが、それにも増して、そのことをいの一番に認めないでいられない豊菊自身の悲哀は、一通りのものではなかった。
ところが、そうしている内、それから十一年、天保九年にはこの花鳥が佐原の喜三郎という学者博徒を参謀として、うまうまと島抜に成功したのである。

—中略—

かくして弘化二年六月、やっと島抜のメンバーが揃った。

豊菊、坂本茂三郎、宝禅、溝呂木村の十太郎、与七、河原明戸村の十太郎、葛飾郡前林村の百姓金蔵の七人である。かねての計画通り、彼等は六月十一日の午前〇時に神湊に集まり、三根村の漁師重助の船をおろして、無我夢中で沖へ漕ぎ出した。

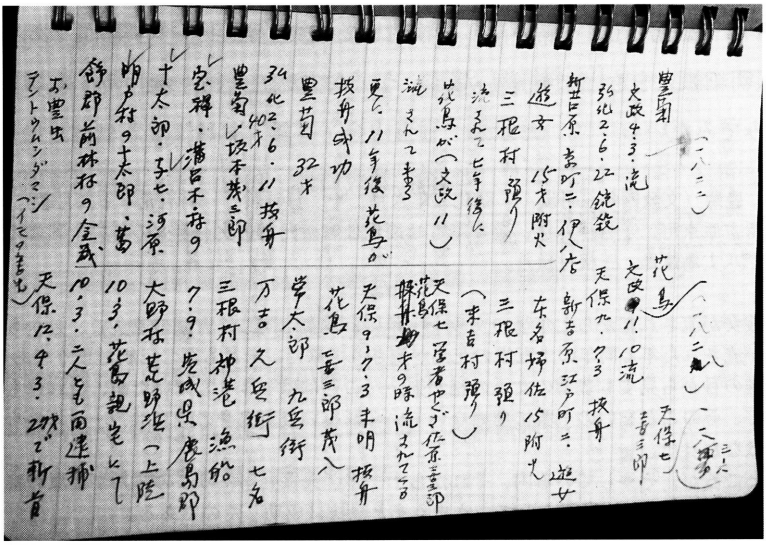
―中略―

いよいよ処刑の位置につかされた豊菊は、さすがに正気の沙汰ではなく、さあ撃て、さあ撃てと怒鳴り散らし、死んだら虫になって作物を荒してやるぞと口走るのだった。しかし、この悪態雑言を封ずるかのように、一発の銃声がこだまして、島生二十五年、波瀾に富んだ豊菊の生涯に終止符がうたれたのである。時に豊菊四十歳。

ふしぎなことに、その年は作物に大層な虫が着き、島民を悩ましたことから、テントウムシダマシのことを八丈島では「お豊虫」と呼ぶようになったという。

〔文献１〕葛西重雄『八丈島流人銘々伝』（昭和39年11月１日、第一書房）より抜粋

この『八丈島流人銘々伝』の「豊菊」の項目と仁愛女子短期大学に所蔵されている津村節子の自筆ノートを比較してみたい。ノートは縦18 cm、横12.5 cmで、裏表をあわせると、150ページある。そのうち、八丈島に関連する内容が記載されているのは、20ページある。文献１の中で、津村節子のノートに記載されている箇所と重なる部分に下線を引いた。両方を、比較してみると、津村



画像１　津村節子直筆ノート（仁愛女子短期大学津村節子文学室所蔵）

節子のノートは『八丈島流人銘々伝』から抜粋し書き写されていることが分かる。

同様に「花鳥」についても『八丈島流人銘々伝』から選り抜き写されているということがいえるが、ここでは紙面の都合上、その過程は記さない。津村節子は葛西重雄の『八丈島流人銘々伝』から、特に興味を抱いた「豊菊」をノートの上段に、「花鳥」を下段に書きうつしているのである。

では、「黒い潮」の「初菊」は、「豊菊」にどの程度、創作を加えてつくられたものなのであろうか。「黒い潮」から、初菊の設定を年代を追って、表にしてまとめ津村節子の創作と思われる部分に、波線を引いてみた。

表 1.「黒い潮」の初菊の設定

	初菊の在所は、冬の長い越後の寒村だった。
八歳	峠を越えた町の旅籠へ奉公に行く。
十三歳	売られたのは、吉原の惣半籬の大町小見世であった。
十五歳	姉と慕っている、労咳になった花筏が行灯部屋に入れられるのを助けようと、厠に火を放つ。三宅島を経て、八丈島へ流される。
二十三歳	吉原から十五歳の花蝶が附火の罪で流されてくる。花蝶は初菊と同じ三根村預かりになる。
三十歳	喜十郎が流されてくる。
三十二歳	花蝶が喜十郎と島抜けする。
三十五歳	宝善が流されてくる。
四十歳	宝善は、自分と同じ年に流されて来た流人の中から溝呂木村無宿の十兵衛、横曾根新田無宿又五郎、河原明戸村無宿の権十を誘い、富三郎は一緒に流されて来た下総国前林村の百姓銀蔵を誘った。 抜舟は失敗し、初菊は銃殺される。処刑の翌年、てんとう虫だましが発生し、島中の作物を食い尽くす。以来島の人はその虫をお初虫と呼ぶようになる。

上記の表１と、自筆ノートを比べた時、まず、いえることは「豊菊」が「初菊」に、「花鳥」が「花蝶」、「喜三郎」が「喜十郎」というように名前を変えて、登場するということである。「豊菊」は抜舟に失敗し、銃殺された翌年、島中の作物を食い尽くした虫は「お豊虫」とよばれるようになるが、「豊菊」が「初菊」に変わっているため、この虫の名が「お初虫」に変更されている。

次に、「豊菊」の設定の中で、八丈島に流されてくるまでの部分が創作であ

るということがわかる。豊菊が八丈島に流されてくる以前のことで、史料として残っていることは、吉原の遊女で15歳の時に火附けの罪で流されてきたということだけである。しかし、「豊菊」をモデルとしているであろう「初菊」は越後に生まれ、貧困のため8歳から奉公へ出され、13歳から吉原で客をとっていた。そして、「初菊」は、花筏という先輩遊女が行灯部屋に閉じ込められ見殺しにされるのを助けるために、罪を犯したという設定になっているのである。

では、なぜ津村節子はこのような創作を加え、「豊菊」から「初菊」を形成したのであろうか。

三.「黒い潮」の創作意図

津村節子が「参考文献」として挙げている大隅三好の『伊豆七島流人史』(昭和49年2月15日、雄山閣)では、「豊菊」を「彼女もすでに四十に手のとどく、姥桜、垢くさい流人ばかり相手にしているわが身がいとおしく、いま一度本土の湯水で島の垢をおとし、江戸のすがすがしい男に抱かれてみたい欲望にかられたかもしれない、彼女もまた一か八かの脱島を決意した」と、自分勝手な好色な人間として扱っている。

岡本綺堂も「半七捕物帳」(『時代推理小説　半七捕物帳第四巻』〈光文社文庫〉昭和61年8月20日、光文社)で、花鳥が柳亭燕枝の人情話『島千鳥沖津白浪』③に登場するとした上で、以下のように登場させている。

> 花鳥はどうも手癖が悪くって、客の枕探しをする。その上に我儘者で、抱え主と折り合いがよくない。容貌も好し、見かけは立派な女なんですが、枕さがしの噂などがある為に、だんだんに客は落ちる、借金は殖える、抱え主にも睨まれる、朋輩には嫌われるというようなわけで、つまりは自棄半分で自分の部屋に火をつけ、どさくさまぎれに駈け落ちをきめて、一旦は廓を抜け出したんですが、やがて召し捕られました。それは天保十年の

ことで、本来ならば放火は火烙りですが、花鳥はなかなか弁の好い女で、抱え主の虐待に堪えられないので放火したという風に巧く云い取りをしたと見えて、こんにちでいえば情状酌量、罪一等を減じられて八丈島へ流されることになりました。それを有難いと思っていればいいんですが、女のくせに大胆な奴で、二年目の天保十一年に島抜けをして、こっそりと江戸へ逃げ帰ったんです。こんな奴が江戸へ帰って来て、碌なことをする筈はありません。いよいよ罪に罪を重ねることになりました。

岡本綺堂は花鳥は文政11年（1828年）に八丈島に流され、天保9年（1838年）に抜舟をすると、『流人明細帳』がしているところを、天保10年に流され、天保11年に抜舟をするというように設定した上で、花鳥を悪女として描いている。

このように、豊菊も花鳥も、悪女として描かれてきたのである。しかし、津村節子は「黒い潮」で「自分もわずか十五歳、附火といっても未遂である。遠島というのはいかにも重い。死罪にならなかっただけで有難いと思え、と言われたが、附火をしようと思い詰めたのは、妓楼の女たちに対するむごい扱いからで、それを吟味もせずに一方的に処罰されたことに対して、初菊も深い怨みを抱いている。もっとも、野良犬を棒でなぐっただけで流刑になった者もいると聞いた」と、初菊の心情を描写している。幕府の体制に虐げられてきた弱者として、「豊菊」を描いたのである。

さらに、「黒い潮」には以下のような箇所がある。

初菊は、三根村のはずれの供養橋に佇んだ。ここへ来れば、死者の姿を見ることが出来るというから、あの世とこの世との境であろう。霊を慰めてやる遺族のいない流人たちの霊も、このあたりにさまよっているのであろうか。

父親のわからぬ赤子を生んだみちと、かげろうほどの命しかなかった赤

子の霊も、このあたりにさまよっているのであろうか。

—中略—

初菊は、自分がこの島で死んだ時、魂はどこへ行くのだろう、と思った。慈雲の魂は、子供のような姿になって国地の方へ飛んで行ったという。魂ならば、あの黒い激流のような潮の流れも飛び越えて行けるであろう。そんな念力のない自分は、供養橋でさまよいながら、いつまでも成仏出来ないかもしれなかった。

津村節子は初菊の心情の描写の中で「流人たちの霊」が「供養橋でさまよいながら、いつまでも成仏できないかもしれなかった」と記しているのである。つまり、豊菊を含む「流人たちの霊」が現在でも供養橋で彷徨っているとしているのである。

津村節子文学室は「八丈」と書かれたアルバムを所蔵している。写真は「92. 11. 11」という日付が入っており、「1992年11月11日」に撮影されたことが分かる。「黒い潮」の連載が始まるちょうど3ヵ月前に写されているのである。

アルバムの中には、葛西重雄と津村節子が「抜舟の場」④の記念碑と、「宇喜多秀家卿之墓」⑤の前で並んでいる写真があり、津村節子が葛西重雄に八丈島を案内してもらった時の写真であるといえる。それらの写真を含め、アルバムの中には25枚の写真がある。そして、そのうちの13枚は、碑文や墓誌に関連する写真である。その写真の中に、三根村の供養橋を海岸側からわたり、右手にあたる場所を撮影したと思われる墓地の写真がある。

実際に、供養橋とその近辺の墓地を目にした津村節子は「供養橋でさまよいながら、いつまでも成仏できない」霊を、鎮魂しようという意味もこめ、悪女として描かれてきた「豊菊」を、社会の犠牲になった女性として描いたのではないだろうか。

津村節子は、藤田昌司「HON　黒い潮　・インタビュー　津村節子『極限

状況を切り開き生きぬく女を描きたい』」（『アサヒ芸能』平成7年7月20日、第50巻27号）で「小説には裕福に生きている女の人は出てこないで、過酷な状況の中で、運命を切り開いていく女が多いのですがいちばんひどい状況といえば昔の遊女ですから、そういう意味で、関心があるんです。この主人公の場合も、どうして生きていけるかと思うほどの状況の中で、家族を支えている責任がありますから、自殺するわけにもいかないんです」と述べている。

吉原から逃げようと行動し、再び八丈島に流されても島抜けをこころみた「豊菊」を、「過酷な状況の中で、運命を切り開いていく女」、「初菊」として描いたのであろう。

おわりに

本論では津村節子自筆ノートや、八丈島の現地取材で撮影された写真から、その執筆過程や創作意図を検証した。津村節子は葛西重雄の案内で八丈島の現地調査を行っている。そして、葛西重雄の『八丈島流人銘々伝』の中の、「豊菊」「花鳥」をモデルとして、「初菊」と「花蝶」を形成した。これまで「豊菊」や「花鳥」は、悪女として記されてきたが、津村節子は「初菊」を越後の貧村に生まれ、15歳で吉原に売られた少女が同輩を助けるために火をつけたというように創作し、鎮魂の意味を含め、社会体制の犠牲となった女性を描こうとしたのである。

（付記）

本研究を成すにあたって、津村節子文学室のある仁愛女子短期大学付属図書館の三和優館長、竹下真弓氏、加藤慎矢氏にご協力いただき、貴重な資料の紹介を快諾していただいたことと、八丈島歴史民俗資料館伊藤宏氏、細谷昇司氏にご協力いただきましたことを心より御礼申し上げます。

[注]

①『海鳴』（昭和40年11月10日、講談社）の帯に丹羽文雄の「『海鳴』を押す」という文がある。

②津村節子は「黄八丈のふるさと―鮮かな色の秘密」（『主婦の友』昭和52年7月1日、第61巻7号）で「二日目は中学校長を定年退職された葛西重雄氏が案内して下さることになっている。葛西氏は、八丈町文化保護委員で、島の生字引のような方だ。夫（作家・吉村昭＝編集部注）が、『漂流』という小説を書く時にもお世話になり、私も以前黄八丈の取材の時にお世話になった」と記している。葛西重雄の1977年以前からの付き合いは吉村昭を介したものが最初であることが分かる。

③伊藤専三が柳亭燕枝の講談を『島衛沖白波』として、明治17年1月14日、滑稽堂より発行している。

④葛西重雄『八丈島青ヶ島碑文墓誌集成』（平成2年10月13日、みずうみ書房）には「昭和五十三年（一九七八）に八丈島教育委員会が立てたもの」とし、「石碑の建っている神湊港周辺は、島の北側に位置して内地と相対し、漁船も多いので、この辺から抜舟が多かった」と記されている。

⑤葛西重雄『八丈島青ヶ島碑文墓誌集成』（平成2年10月13日、みずうみ書房）には、「八丈島に送られた流人一号」と記されている。

＊討議要旨

谷川惠一氏より、発表の中で引用されている岡本綺堂『半七捕物帳』について、これを津村節子が参照し、人物造型を行ったのかとの質問があり、発表者は、津村が『半七捕物帳』を実際に読んでいたか、現在明確になってはいないが、花蝶や豊菊について「調査を尽くした」と述べているので、読んでいる可能性はあるとの考えを示した。そして、女優・山田五十鈴が「大阪屋花鳥（島千鳥沖津白波）」の舞台に出演する際、葛西重雄氏が八丈島を案内しており、葛西氏がその事をよく語っていたとの歴史民俗資料館の方の証言もあり、葛西氏が津村に伝えたとも推測されると回答した。また、吉村昭・津村節子夫妻、大庭みな子、曽野綾子も葛西氏宅を訪問しているとの説明があった。続いて武井協三氏が、【資料六】『八丈島流人銘々伝』には、先の討議で出てきたような芝居や講談が入り込んでいると思われ、特に放火をするのが二人とも十五歳というのは「八百屋お七」を踏まえたものであろうとの見解を示した。更に、丹羽みさと氏より、遊女が放火して島流しに遭うという物語の型（パターン）に関して、十六歳以上は火付けにより火刑となるが十五歳以下では流罪となっているので、津村自身が参考文献として挙げていない江戸の法令集を参照した可能性はないだろうかとの質問があった。発表者は、文献を照らし合わせた結果、何年に火付けをし、何年に島流しとなったかなどの骨格の部分は『流人明細帳』の中に書いてあることで、それ以外は『八丈島流人銘々伝』の創作の部分もあると思うが、初菊の過去の設定については津村の創作ではないかとの見解に至っているとの回答があった。